歴史探訪

| 第4回 |

関ヶ原の合戦 ifワールド

もし、小早川秀秋の裏切りがなかったら歴史はどうなっていただろうか…？〈後編〉

万人が天より平等に与えられるもの、それは何であろうか？ ……死である。人は誰もが死から逃れられないことを知りながら、それを意識することを避けている。出世欲・名誉欲・打算や自分本位の欲望より発せられた人を欺き貶める行為、その人がのちに自分の死を目前にしたとき、自らの歩んできた生きざまをどう振り返るだろうか。小早川秀秋はこの関ケ原の合戦で自らの冒した卑怯な行為に対して、自虐の念に苛まれ二年後狂死している。当時世間では彼の心に鬼が棲み付いていると言われていた。しかし、自虐の念で苦しんだことには、鬼どころか、かえって人間らしささえ感じる。人間はさまざまな欲で知らぬ間に間違った行動をしてしまうもの。煩悩に惑わされることなく人間らしく生きたいものである。

『第一部』

1 家康が逃げ込んだ岐阜城の陣中

関ヶ原の戦いにおいて、小早川秀秋を東軍に寝返りさせることに失敗し、関ヶ原の合戦で大敗北を喫した家康は、直参の井伊直政の諫言を受け入れ、一旦岐阜城への撤退をした。岐阜城内では、家康と側近のみで今後の作戦につき密談が行われていた。その面々は、徳川家康、井伊直政（直臣）、本多忠勝（直臣）、松平忠吉（家康の四男）、池田輝政（家康の女婿で岐阜城を約五年支配していたので地理に詳しい）の五名である。

まず、口火を切ったのは井伊直政であった。

「殿、一旦はここへ逃れられたものの、今後いかに為されまするか」

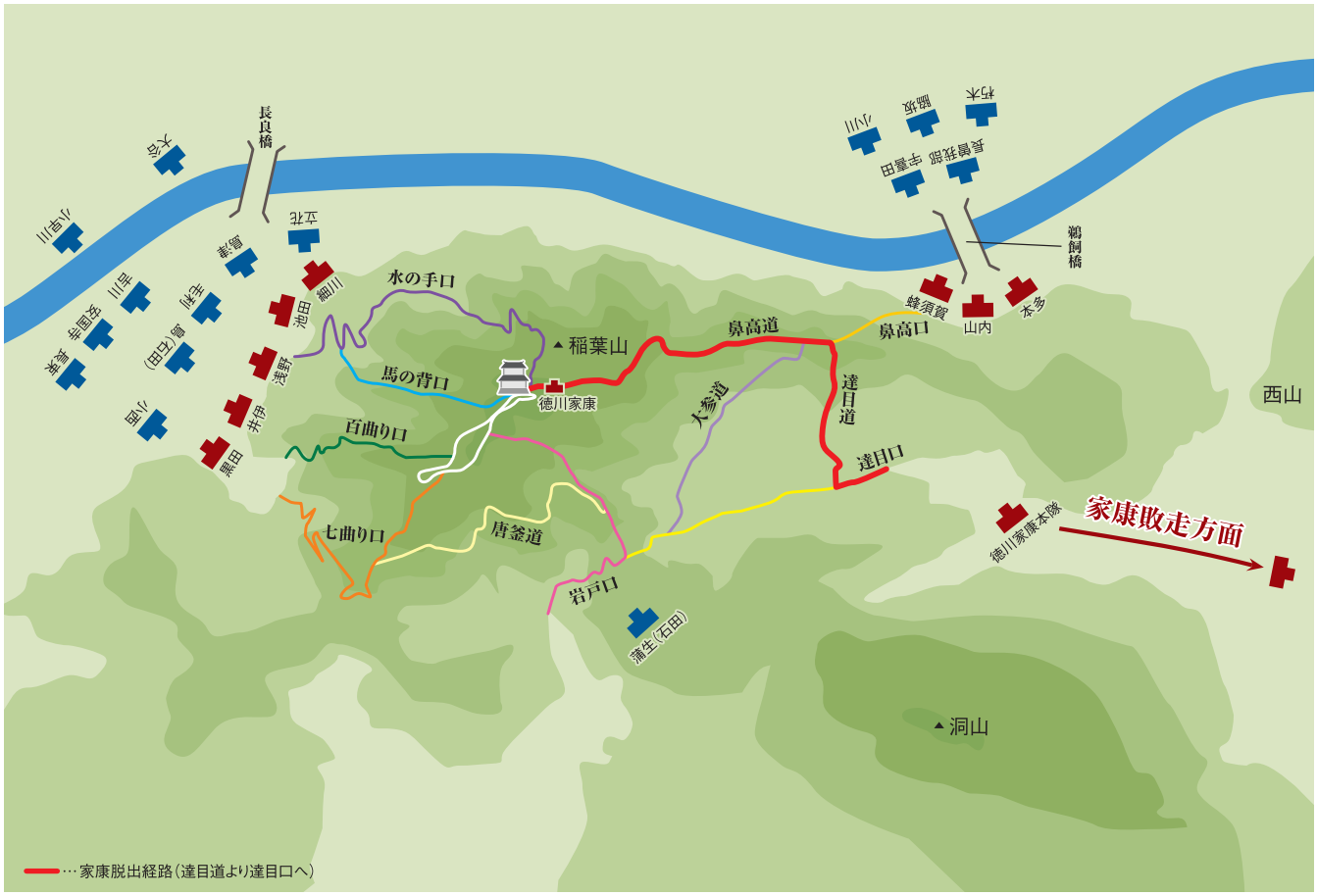
「う～、それよのう」

未だ決めかねていた家康は本多忠勝に、

「そちはどうしたらよいと思う。存念を申してみい」
と振った。
「はは…。ではわたくしめの存念を申しあげ奉ります。この岐阜城は難攻不落の要害でござりまするが、長居は禁物と考えまする」
「それはなぜじゃ」
と家康が問うと、忠勝は次の三つの理由を挙げた。
「一つには、これから冬になり申す。ここで籠城いたしても寒さに兵が耐えられませぬ。また、今回は急なことゆえ、兵糧（ひょうろう）、弾薬等々の補給の準備等々ができておりませぬ。
　二つには、兵力でいえば、敵は八万を超えると見受けられまする。我が方は黒田隊、細川隊等合算して三万五千。この多くの兵をここで籠城させるには、山の頂上ゆえ寝場所の確保が難しく、また西軍と対峙している麓（ふもと）の諸侯との連絡、軍議一つとっても困難を伴いまする。
　三つには、今、間者の知らせですと、石田三成と宇喜多秀家が大坂城へ戦勝報告に出向いておるとのこと。大坂城におります毛利輝元が、秀頼公を奉じて出陣してくることも考えねばなりませぬ。そうなれば黒田、細川、それに山内も、まず寝返ること必定と考えまする」
「では、岐阜城を枕に戦おうぞ」
と家康は強がった。井伊直政が続けて、
「殿、それは決してなりませぬ。今、四つある登り口（水の手口、馬の背口、百曲り口、七曲り口）を守っておりますお味方衆の豊臣恩顧の大名は、秀頼公ご出馬とあいなりますれば、必ず寝返るものと考えまする。黒田、浅野、山内は、豊臣家に恩を感じておりますゆえ、決して秀頼公に弓を引くことはありますまい。（図1参照）
　かの者たちは、三成憎しと秀頼公の上杉討伐の下知のもとに、殿に合力いたしているもの。主家はいまだ秀頼公であり殿に臣従いたしたのではござらぬこと、くれぐれもお忘れにならぬよう願い奉ります」
「では、この難局をどうすればよいのじゃ」
といらついた表情で家康は問いただした。直政は続けた。
「毛利輝元の出陣とならば、島津も毛利秀元も早急な攻撃はいたしますまい。輝元殿の着陣を待つことと思いまする。それゆえ、岐阜城総攻撃まで少々時を稼げます。この時こそ岐阜城主であられた池田殿の土地勘を活かすのです」
家康は池田輝政に目をやり、
「よい手立てはあるか」
と尋ねた。輝政は、
「籠城は、兵糧等の準備があれば一年は耐えられましょう。しかし、それを欠く今の状況では、滞在が長引けば自滅ということにあいなりましょう」
家康はいらいらしながら、
「早くそちの存念を申せ」
池田輝政は、率直に存念を語った。
「西軍の弱点は、この稲葉山の地理をあまり知らない事でござりまする。けもの道のようなものではございますが、この山には達目口という東方に抜ける間道がございます。
　この輝政が城主時代に密かに作りました抜け道でござりますゆえ、地元でもまったく知られていない道でござりまする。目下の情況では、これを抜けて秀忠公本隊と合流する手しか、策はないと存じまする」
そして直政は、
「秀忠公の軍勢三万八千はもうすぐ岐阜に到着予定でござりまする。
　また、殿が率いておられる親衛隊三万の兵も、密かに達目口に集結させております。敵は今のところ殿の本隊の居場所を掴んでいないものと思われまする」
本多忠勝は、
「南に抜ける岩戸口が、下山距離にしては一番よいのではないのか」

輝政は、
「忠勝殿のお説もごもっともでござるが、すでに石田三成の家老蒲生郷舎（さといえ）の二千の兵が、岩戸口を固めておりまする。また、他のすべての道も西軍が陣をはり守備を固めておりまする」
家康は、
「秀忠との連絡は、いかが致す所存か」
と尋ねた。直政は、
「その点に関してはご心配にはおよびませぬ。当方の伝令やわっぱ（忍びの者）等に秀忠公と常に連絡をとらせてござりまする」
　家康はすこし安堵したのか、昔の事を言い出した。
「忠勝よ、思い出すのう。明智光秀が京の本能寺で信長公を襲い謀反に至ったとき、わしは堺で物見見物しておったのう」
忠勝は思い出した。
「そうそう… あの折は光秀の武者狩りに遭遇せぬかと肝を冷やしましたぞ。こちらは井伊殿始め重臣三、四名の供廻りのみでありましたので、武者狩りに遭遇いたしましたら、われら命はなかったことでござりましょう。」
また、井伊直政が続けた。
「あの時は、ありとあらゆる街道を光秀方に押さえられておりました。そこで、仕方なく伊賀の険しい山道を経て加太峠を越え、伊勢の白子から海路で岡崎に還りました。あの時ばかりは、殿も当家ゆかりの京都の知恩院でご自害の覚悟を示されてござりました。

図1 岐阜城への撤退後の布陣図



また、朝倉義景との金ヶ崎の戦いで、義景の家老三矢飛騨守率いる二万の大軍に、殿が先鋒として対峙しておられた時、背後で浅井長政の裏切りがありました。急遽信長公の撤退命令により数人の重臣のみで引き返し、殿軍の秀吉公に助けられて無事、三河に撤退できました。あの時もお命びろいの情況でした」

「そうであったな。わしもあの時ばかりは信長公のご命令で先鋒を承っていたゆえ、越前の一番奥深くに陣を構えていたからのう。朝倉と浅井の挟み撃ちにあったので、わしも『もはやこれまで』と死を覚悟したものじゃった」

と家康は振り返った。

三人のよもやま話を遮るように池田輝政は、

「殿、一刻も早くこの城より退去なされませ。敵の総攻撃は必ずしも総大将毛利輝元公の着陣を待ってとはかぎりませぬ。副将が奇襲を得意とする島津義弘や戦さ慣れしております毛利秀元でございますれば、如何なる手を使ってくるか分かりませぬゆえ急ぐべきかと存じまする」

「あいわかった。豊臣家の『千成瓢箪』の馬印でも掲げられたら、浅野、黒田、山内も主家豊臣家には弓引けぬからのう。これは危うい。ただちに退去するぞ。輝政、案内いたせ」

そこで本多忠勝は重臣牧野大膳を守備隊長に任じ、

「牧野よ。たいまつをもっと増やし、徳川家の旗印を倍に増やせ。これから殿は東の達目口に下山される。しかし、敵のみでなく味方の諸侯にも殿の退去を悟られることの無きよう、家康公は岐阜城に在すかのように欺くのじゃ。よいか、しかと申し付けたぞ」

と言い残し、家康と重臣の一行は鼻高道を抜け達目道を通り達目口へと下山していった。

2 西軍の軍議

西軍の軍議に列席した武将は、追捕軍大将小早川秀秋、副将の島津義弘、毛利秀元、他に大谷刑部吉継、安国寺恵瓊、小西行長、長宗我部盛親、長束正家、島左近、蒲生郷舎、脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、立花宗茂等岐阜城攻略に参陣している面々である。

関ヶ原の合戦で勝利しているので軍議は明るい雰囲気で始まった。大谷吉継が皆の前において、

「このたびは、小早川秀秋殿のご賢明なるご判断により我ら西軍が勝利いたした。主君秀頼公をはじめ、淀君様におかれては大層お喜びのことでござりましょう。石田殿は、お約束通り秀頼公のご成人まで、関白に小早川殿を推挙すべく淀君様をご説得なさるつもりであり、我ら西軍の武将の面々からも同様に上申いたす所存でござる」

小早川秀秋は、

「当初静観しておりましたことにつきましては、皆さまに不信の念をお与えし申し訳なく存ずる。実のところ家老の平岡と稲葉が東軍の黒田長政と通じており、平岡などはわしに内緒で、弟の横山監物を勝手に人質に出しておったのじゃ。わしの不徳の致すところでござる。

しかし、わしは今は小早川家に養子に入っておるが、秀吉公の親族である。家康の天下にしてしまっては、秀吉公に育てられたご恩に報いることができ申さず。豊臣の天下を奪い取ろうとする奸賊家康は、生かしておくわけには出来ませぬ。ここで誅殺せねばと考えておりまする。そこで、皆さまにお集まりいただき、この難攻不落の岐阜城をいかに攻め落とすかについてご存念をお伺いしたくご参集いただいた次第でござる」

安国寺恵瓊が発言した。（永く毛利家の軍師を務めた策士）

「大局的な戦略として、兵の犠牲を最小限にとどめるため長期戦を覚悟で兵糧攻め戦法をとるか、それとも兵、弾薬、すべてを投入して力攻めを敢行し、一気に山頂の家康を誅殺するかをまず決めねばならぬ」

毛利秀元（西軍総大将毛利輝元のいとこ）は、

「敵の戦意は地に落ちておる。黒田長政、細川忠興、山内一豊もこれまでの戦いで敗残兵の集まりになっており、戦意これなしの状態。ここは輝元殿のご出馬を待つまでもなく、いますぐ総攻撃をかけるべきである。秀忠の率いる精鋭部隊が到着する前に決着をつけ、家康の首を取るべきである」

大谷吉継は一同の意見を一通り聴いた後、自らの存念を述べた。

「力攻めは二の手と心得まする。今度の戦いでは当方側の兵力の痛手も大きいものがござりまする。家康はこの一戦で負けたとはいえ、家康本隊三万と秀忠隊三万八千、合計六万八千の軍勢は侮れぬ兵力でござる。これと戦うには、こちらの兵力の温存が必要である。そこで孫子の兵法にあるように、『戦わずして勝つ』方法がござる」

秀元は、

「このような有利な情況で、なぜ家康を攻めぬのか。吉継、臆したか！」

と挑みかかる体で責めた。吉継は、

「まあまあ秀元殿、そうお怒りにならず最後までわしの存念を聴いていただけぬかのう。そもそも家康は、豊臣家の大老筆頭という立場で、秀頼公のご命令に従って上杉討伐に出向き、豊臣恩顧の武将も合力しておる。黒田、細川、山内等の武将も主家秀頼公に従ったまでのことでござる。家康に臣従したわけではござらぬ。

そこでじゃ。一つ策を考えついたのじゃ。大坂城に早馬を走らせ石田殿と宇喜多殿を通して、秀頼公の馬印『千成瓢箪』を拝借し、黒田や細川に見えるように掲げるのでござる。彼らは三成憎しと秀頼公の上杉征伐の御下命により家康に合力したまでのこと。主家豊臣家に敵対する気などないはずでござる。秀頼公がこちら側としてご出馬なされたとなれば、必ず投降してくるものと思いまする。そうすれば、黒田長政、細川忠興、山内一豊をはじめ豊臣恩顧の武将は、大義名分が無くなりすぐにでも寝返ることとなりましょう。かれらも豊臣家に対して逆賊の汚名を着せられたまま戦さはいたすまい。必ず恭順してまいりましょう。そして、恭順してきたらその証しとして岐阜城攻撃の先鋒を務めさせるのです」

小西行長が、

「真によいお考えと思うが、黒田、細川、山内殿は素直に投降するだろうか」

大谷吉継は、

「必ず、投降してまいりましょう。投降させる良い策がござりまする。それは、お家安泰をちらつかせるのでござる。関ヶ原の合戦における我が西軍の勝

利で、天下の覇権は豊臣家と明確になってござる。
東軍に味方した諸侯は今“お家取り潰し”の沙汰を一番恐れておりましょう。この時こそ、慈悲をかけてやるのです。そうすれば、豊臣家にとってさらによい忠臣となることでござろう。各武将もそのことを見抜けぬ“うつけ”とは思われませぬ」
長宗我部盛親は、
「家康には以前岐阜城主だった池田輝政がついております。逃げられる可能性も考えねばならぬ」
大谷吉継は、
「ここで、家康に逃げられようと構いませぬ。天下の形勢はもはや徳川にはありませぬ。岐阜城を運よく脱出できたにしても、高齢の家康にはもはや何も出来申さず。
たとえ江戸城に籠城しても、江戸城の防備はいまだ不完全でござる。長く防備できる城ではござらぬ。また家康は今回の戦(いく)さで孤立しており、この状況で家康に味方する武将はおりますまい。東軍側についた伊達政宗や東軍に味方した武将も、内々に家康を見限りご赦免を願う書状を送りつけてきておる。よって、上杉景勝を大将に伊達、佐竹に江戸城を包囲させ、家康に秀頼公への恭順の誓いをさせるのじゃ。従わぬ時こそ徳川家滅亡の時でござろう」
島津義弘は、
「吉継どの。それはよい考えじゃ。わしも賛成でござる。毛利殿、戦うばかりが武将ではなかろう。どうじゃ。ここは、島津の顔を立ててくれぬか」
毛利秀元も、島津義弘が賛成であれば逆らえなかった。
「承知した」
これで軍議はまとまったのである。

3 岐阜城攻撃

大谷吉継の戦略は見事に成功した。秀頼公の馬印の『千成瓢箪』を掲げたところ、岐阜城を家康のために護っていた黒田、細川、山内などの主だった武将は、豊臣家に叛旗をひるがえした敗軍の将家康を見限り投降してきた。そして、黒田長政は率先して岐阜城攻撃の先鋒を申し出てきた。
小早川秀秋は、六つの登り道（水の手口、馬の背口、百曲り口、七曲り口、鼻高口、岩戸口）からの一斉攻撃を命じた。（図1参照）また、大津城攻めで手間取り関ヶ原の合戦に間に合わなかった立花宗茂、毛利秀包をあわせると十万を超える大軍である。山の緑が、各隊の甲冑のカラフルな色にかわるほどであった。
標高三百三十八メートルもある稲葉山である。馬は使えない上、絶壁も各所にあり難航不落の山城と言われるだけあって攻撃は困難をきわめた。
このような状況下での一番乗りは黒田長政であった。そして、ここで長政は驚きを隠せないほどの光景を目の辺りにするのである。
城にはもう家康どころか少数の足軽しかおらず、もぬけの殻であったのである。
「家康殿、黒田長政にござりまする。どこにおいでかお答えくだされ」
と叫んだか返答がなかった。そこへ家康重臣の守備隊長牧野大膳を、家臣が捕らえてきた。
黒田長政は牧野を問い詰めた。
「牧野殿、家康殿はどちらにおわすのか」
この詰問に対し当初は渋っていたが、そのうち薄笑いを浮かべて言った。
「黒田殿、関ヶ原での戦いお見事でござりました。拙者感服しておりまする。その黒田殿ゆえ申し上げましょう。家康公は昨日の夜、すでに夜陰に紛れてこの稲葉山を下山なされた」
長政は、みるみるうちに自分の顔色が怒りで赤く染まってゆくのがわかった。
「何!!麓(ふもと)で家康殿を護ろうとしていたわれらを見捨

てて逃げたということか?」
「左様でござります」
「なぜじゃ。われら家康のため三成殿と戦い続けてきたのでござる。この裏切りの仕儀はなんたる所業か。この長政をこれほどまでに愚弄するとは……許せん」
　牧野は止むを得なかった事情を手短かに述べた。しかし、どんな理由があろうとも長政には承服できかねた。
「しかし、登り口はすべて我らが押さえているはずじゃ。逃げられようものか。家康め」
牧野は、
「いえ、逃げおおせたと存じまする。池田輝政殿が以前この岐阜城主でござりましたことは、長政殿もご承知でござりましょう。そのとき池田殿がつくられた間道がござります。それを抜けて家康公の本隊に辿り着き、ぼつぼつ秀忠公の精鋭部隊とすでに合流を果たされている頃合いでござりましょう」
「忌々(いまいま)しい家康め、牧野その抜け道はどこじゃ」
「それは達目口と申す。鼻高口をめざして鼻高道を下り、途中南に折れて達目道を降り東へ出る抜け道でござる。輝政殿がご城主のとき、補給道として密かにつくられたものと思われまする」
黒田長政は早速、
「西軍本陣にこの仕儀をすぐにお伝え申せ。わしもすぐに下山する」
と供回りに言い渡した。
　早速、西軍の軍議が開かれた。毛利秀元は、
「家康め!御身大切で、味方の武将にも何も言わず逃げ出すとは、武人として言語道断、小心者の馬脚を現しおったわい。黒田殿も見る目がござらぬのう」
黒田は、
「面目次第もござらぬ。戦国の御代とはいえ信義もわきまえぬとは、家康も落ちぶれたものよ」
安国寺恵瓊は、
「物見の連絡では、達目口の家康本隊は鵜沼方面に移動中とのこと。秀忠の部隊とは半時(約一時間)もすれば合流するであろう。秀忠の率いる三万八千と家康本隊を合わせ六万八千となり、迂闊には手の出せぬ兵力である。さてこれから家康がどう出るかである」
大谷吉継は、
「家康は、天下を狙っておる。彼は大変慎重で用意周到な性格の持主であるので、この時機に面子にこだわって再度開戦に持ち込む程愚かなことは致すまい。ここは一旦江戸へ立ち戻り籠城策をとって、天下の成り行きを見定めるであろうと思われまする」
日ごろ口数の少ない小西行長が、
「しかし、六万八千もの兵力ならば先の戦いの汚名を晴らすべく、陣形を整え三河あたりで陣構えをして当方と再度決戦に及ぶ可能性もござろう」
安国寺も大谷吉継も、
「それはまずなかろう。家康は歴戦の知将である。時節を見ることは長(た)けてござる。いま戦う愚行をして恥の上塗りはいたすまい。また、三河は徳川家父祖伝来の土地でござる。われらにとっても三河で戦うことは不利でござる。まず、一番大切な兵糧の調達からして地元の協力は得られまい。
　ここに到っては秀頼公にとって家康は敵に値せず。江戸に逃げたくば逃がしてやればよい。家康の監視については上杉、伊達、佐竹に秀頼公より下知すれば、四面楚歌の今の家康は迂闊(うかつ)には動けまい。それからじっくり家康を料理すればよい」
島津義弘も、
「ここは深追いせず大坂城に凱旋し、戦後の仕置きをせねばなるまい。各々方それでよろしゅうござるな」
島津義弘の言葉には重みがあり誰からも異議は出なかった。

図2 関ヶ原合戦後の領国支配図

『第二部』

現代のある家族の団欒

この家は、夫婦と中学一年の太郎、そして小学校四年生の花子の四人家族である。太郎は、歴史好きの父親の歴史談義に興味津々(しんしん)である。

太郎「ねえねえ父ちゃん、家康だったけな。その後、どうなったの」

父親はコーヒーを飲みながら、

父親「さぁ。どうなったと思う?」

太郎「わかんないよ!じらさないで教えてよ」

父親は、わざともったいぶって話しはじめた。

父親「家康は、再度豊臣家と戦うことは避け江戸城への撤退を命じたんだ。しかし、ちょうど吉田宿(現在の豊橋)に着いた所で死んでしまうんだよ。当時のことで、正確とは言いがたいが、今で言う心筋梗塞か脳梗塞だと言われているんだ」

太郎「家康が死んじゃったらどうなるの？」
父親「息子の秀忠は、すぐに豊臣方に降伏してきたんだよ」
太郎「どうしてすぐ降伏しちゃうの？六万八千の兵隊がいたんでしょ。どうして？」
父親「父さんは徳川家康と豊臣秀吉の生きざまの違いが秀忠の判断に影響を与えたかもと考えているんだよ」

父さんがわかりやすく家族に説明をしたことを、要点をかい摘んで簡単に述べてみよう。

［豊臣秀吉］という人物

①秀吉は百姓出身なので、初めは金も家来も何も無くゼロからのスタートであった。従って自分のもらった給金を分け与えたりして、すこしずつではあるが協力してくれる仲間をつくっていった。

②他の大名家のように、先祖代々仕えてきた家来がいなかったため、自分の食い扶持を削ってでも秀吉個人に従う家来を育てていった。（加藤清正、福島正則、石田三成、蜂須賀小六、大谷吉継、小西行長等々は、もとは皆、百姓か商人であり武士ではない。）

③優秀な人材はなんとしてでも家来にし大いに尊重した。（竹中半兵衛、黒田官兵衛等々）従って家来に「この方のためなら死んでもよい」と思わせる人間としての魅力があった。

④自分の育てた人をどんどん大名に取り立てていったので、取り立てられた大名は損得考えず心から'ご恩に報いるべくご奉公'の気持ちが強い。

［徳川家康］という人物

①家康は松平家という代々続いた大名家の嫡男であった。したがって、生まれながらの大名として譜代の家臣に囲まれて育った。家康は充分な教育を受けることができたが、代々の家臣以外交流しておらず、また家康はその人脈づくりの必要性すら感じていなかった。よって晩年における家康の権力は、他の大名にとっては豊臣家の権力基盤が前提となっていた。秀吉の死後大老筆頭として権力を振るえたのも豊臣家あっての事であり、秀吉から与えられた大老という肩書に他の武将が従っていただけであって、家康個人に臣従したわけではない。

②関ヶ原の合戦で負けて権力を無くしたと共に皆は離反した。敗者である秀忠の境遇に合力しなかったのは当然の成り行きと思われる。

③秀吉と比べ他の武将へ施しをしていないので、直臣以外いざというときに徳川恩顧の大名として自分の武門を潰してでも、合力しようとする武将が独りもいなかったと考えられる。自業自得というべきか。

江戸へ家康親子が敗走した時点の勢力をみると、豊臣方は30万から40万人を動員できる力を持っていた。家康を失った秀忠にとって一層戦意が落ちたのではないかと思われる。

家康さえ生きていれば、家康は武将としての戦績もあり、時節到来とあらば元東軍武将の中から家康に味方する者もいたに違いない。ただ、秀吉のように有能な人材をとりたてて大名領主にしていない。また、譜代の家臣は大切にしたが家康に恩義を感じ外様の武将を育て、領地を分け与え恩義を感じさせることができたにもかかわらず、それをしていない。よって窮地に立った時味方してくれる外様の武将が少ないこと、また秀忠は戦さの経験が乏しく、ここで戦っても勝ち目のない事等々充分わかっていた。

また、今回の戦いで東軍の総大将として秀忠は責任をとらされ切腹の上お家“お取り潰し”になること必定と考えられた。そこで、重臣たちはその先手を打って徳川家の存続のためにも、ここで武装解除し恭順の意を示し、秀忠の切腹だけは避けようとした。

父親「要約するとこういう事なんだけど、太郎わかるかな?」

太郎「う〜ん。なんとなく」

父親「太郎がもうすこし大きくなったらわかるよ。今はそれでいいんだよ。ところで、戦国時代は、主君の家に従うのではなく、あくまでも、主君個人に従っているという考え方が主流だったんだよ」

花子「意味わかんない、それってどういうこと?」

父親「判りやすくいうと、徳川家康には従っても、その息子の秀忠が愚鈍であれば必ずしも従うとは限らないと云う事なんだよ。秀吉も信長の子孫に政権を譲ってないよね。

また、藤堂高虎という武将は七人も主君を変えているんだよ。自分の家の存続のため、誰に従ったら自分の家のためになるかが判断の基準だったんだよ。徳川家の場合、家康は武将としての知略、経験、実績等々を皆が認めていたので武将を従わせることができた。しかし、秀忠にはそれがなかった。当然、関ヶ原の合戦で負けたことで秀頼公から徳川家取り潰しの沙汰がくることは、明らかだったしね。そうなれば徳川家の家臣だった人は、自分を重んじてくれる大名に仕え直すのは、ごく当たり前のことだったんだよ」

花子「みんな冷たいね」

父親「『家に仕える』という考えが芽生えるのは、もっと後のことで、武士がある意味サラリーマン化してからなんだよ」

母親「徳川はどうなっちゃったの」

父親「結論を言うとね、徳川家は取り潰しになり、秀忠は高野山に幽閉されて一生を終えることになったんだ。秀忠の正室お江殿は淀君の妹ゆえ、大坂城三之丸で余生を送った。秀忠の長子家光は比叡山、弟の忠長は徳川家ゆかりの知恩院で、僧として生涯を全うしたんだよ」

母親「じゃ、この後の支配体制はどうなったのかしら」

母親のこのするどい質問に対し、

父親「ワー。おかあさんはいつも厳しい質問をするね」

母親「あらそうかしら。いつもやさしくしてるでしょ!?」

父さんがその後の政治体制について、家族に説明した要点をかい摘んで述べてみよう。

1. 武家政権と公家政権の二元支配を廃止し、摂関家等の公家制度を廃絶する。律令制度を範とし、官制は太政官、神祇官と八省（中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大蔵省、宮内省）で天下を治める。
2. 天皇を国主とし、豊臣家の当主は天皇を補佐すべく関白または摂政になる。
3. 全国を十五の領国に分割する。ただし東北の北部と蝦夷は豊臣家の直轄地とする。
4. 各領国に一大老と十奉行を任命し、連邦政府を大坂に置く。また、各領国の自治支配を認める。
5. 国の政務を掌（つかさど）る十四の大老の内、常に九名以上が大坂の連邦政府に詰めることとし、国政のため大坂に二年、国許に一年居住とし、大老の正妻は常に大坂に在住させるものとする。豊臣家を中心とする大老の合議による集団指導体制を敷く。
6. 金山・銀山はすべて豊臣家の直轄地とする。
7. 海外との貿易港は各領国一つとし、再度検地を行って石高を確定させ豊臣家六百万石、大老は一律二百万石と定める。各領国の奉行は主君である大老が決め、大老から家禄を授けることとする。
8. 大老の処遇の決定権は豊臣家にあるが、原則として大老の合議で発案し豊臣家に上申、決裁を受ける体制とする。

父親「まぁ、父さんの記憶は大雑把だが、だいたいこのように決められていたんだ」

太郎「この政治体制は、誰の構想なの」

父親「主に石田三成、小西行長、長束正家等、当時、文治派と呼ばれていた人々だよ」

母親「もし、大老の誰かが謀反（むほん）を起こしたらどうするの?」

父親「いい質問だね。その抑止力として圧倒的な財力と軍事力を豊臣家が持つようにしたんだ。豊臣十五万騎と呼ばれる連邦軍をつくり、最新の装備で富国強兵にもっとも力を注いだ政権であることが特徴なんだ。一方大老たちにはきびしい軍備の制約を設けんだよ」

花子「それじゃ他の大老さんたちは、戦っても負けるじゃない」

父親「そうだね。豊臣家に対して逆らっても、まず勝てないと思い込むだろうね。その思いが抑止力になっていたんだ」

太郎「武家政権と公家政権の一元化って、どういうことなの。」

父親「それはね、こういうことなんだ。遡（さかのぼ）ること奈良時代、平安時代には、律令制度に基づいた地方官吏「国司」が徴税をしたり、治安維持をしていたんだ。それは太郎も知ってるよね。しかし、『墾田永年私財法』の施行で次第に土地の私有化（荘園）がすすんで荘園が増え、国司の過酷な徴税行為から逃（のが）れるため、地方の土豪や農民は、自分の土地を国司の力では対抗できない中央の有力貴族や寺社に積極的に寄進したんだ。そして、その荘園管理を任された土豪は、荘園を守るため荘園領主（有力貴族、寺社）に頼まれて、武器を持つ武士となっていったんだ。ここまでは、わかったかな」

太郎「土豪や農民からすれば、荘園に組み込まれた方が税金が安かったんだね。そこまではわかったよ」

父親「鎌倉時代になると、征夷大将軍に任じられた頼朝は、国司とは別の守護、地頭を置き諸国の治安維持や徴税権をもった土地の支配権を、彼らに認めていったんだ。ここで武家

の守護、地頭と従来からの国司の二重支配が始まったわけなんだ。律令制は実質上崩壊し、律令制で定められた身分（正二位とか従三位など）制度のみが残り、実権の伴わない権威づけのみの官位名称になっていったんだよ」

母親「それを豊臣政権が、名実共にある身分制度にしたの？」

父親「そうなんだ。大老は全員正二位にし、軍事力をそなえた権力に従来からの天皇制のもつ権威を加味して、権威と権力の一元化を計ったんだ」

太郎「じゃ。天皇の権威を利用して国を治めようとしたんだね」

母親「だったら豊臣秀吉の統治手法の踏襲ね。」

父親「でも、天皇の権威を利用したのは同じだけど、秀吉の独裁体制とはだいぶ違うよね。また、三成は貿易立国をめざしていたので、交易による富国強兵を提唱したんだ。従って、文化や軍備もイギリスやフランスと同じように進歩してきたんだね」

太郎「だから、日本は植民地にされることもなくずっと独立国として統治できたんだね。ところで、今の日本は18州あるんだけどどうして？」

父親「それはね。三成が決めた領国がその後そのまま19世紀後半に州となって、今に至っているんだね。そしてその頃までにアメリカやフランスの統治方法を学んで取り入れたんだよ。また、天皇は国王ではなく国政に口出ししないが、人々に敬愛される存在という形になったんだ」

父親「花子ちゃん。わかったかな！」

花子「ちょっとだけ……」

父親「そうだね、小学校四年生だもんな。でも、そのうちわかるよ」

筆者より

これまで、関ヶ原合戦のifシリーズ3編にわたって書いてきた。3編とも歴史書を書いたつもりはない。あくまで小説として書かせていただいた。従っておもしろさを感じていただければ、それだけで満足である。いま語られている歴史は勝者の歴史であり、敗者の視点から語られていない。

勝者は一方的に敗者を抹殺する権限をもち、敗者の大義を永久に奪い去ることが出来る。

『明日を読むには歴史に学ぶべきである。』と思う次第である。

（2013.2.7）共立総合研究所　特命研究員
霊山顕彰会岐阜県支部事務局長代行
三矢 昭夫